

ラファイエット夫人の世界観と小説技法

LA CONCEPTION DU MONDE ET L'ART ROMANESQUE CHEZ MADAME DE LAFAYETTE

博士後期課程 仏文学専攻53入学

滝川 広子
HIROKO TAKIGAWA

古典主義小説、心理小説の傑作と言われ、現代まで読み継がれている『クレヴの奥方』の作者、ラファイエット夫人は、この作品の前に二つの小説を発表している¹⁾。『モンパンシエ公爵夫人』と『ザイード』である。『モンパンシエ公爵夫人』から『クレヴの奥方』に至るまでに、ラファイエット夫人の世界観は、どのように変わって、あるいは、深まっていったであろうか。中編小説から伝統的な長編小説、そして再び中編小説へと戻る、この過程の中で、彼女の小説技法はどのように開花していったのであろうか。小説家、ラファイエット夫人の歩みを、この二点から、少し考えてみたいと思う。

I 『モンパンシエ公爵夫人』(1662)

名門の一人娘で若く美しいヒロインは、許婚者だった男の兄、ギーズ公と密かに愛し合っていたが、周囲の人々の打算によって、ギーズ家との婚約は破棄され、新たな相手、モンパンシエ公と結婚する。シャルル九世の時代、宗教戦争の混乱のさなかである。戦争で夫が不在の二年間で彼女の美しさは完成され、夫の親友、シャパンヌ伯の導きもあって、聡明で気高い、モンパンシエ家の若奥様に成長した。シャパンヌ伯は彼女を熱愛するようになるが、彼の求愛は受け入れられず、夫人の側では友情を示すのみである。一方、戦場から戻ったモンパンシエ公は、妻の美しさに驚くと同時に、生来の嫉妬深さから不安を抱くのだった。そうしているうちに、モンパンシエ夫人は、偶然、ギーズ公と再会する。三年ぶりに彼女を見たギーズ公は、昔の愛情を思い出し、それ以後、機会あるごとに自分の気持ちを伝えようとし、夫人の方にも、以前の感情が蘇る。彼女は、踏み止まろうとはするが、段々と愛情に引きずられてゆき、やがて、ギーズ公に自分の気持ちを知らせてしまう。二人に疑いを抱いたモンパンシエ公は、妻をシャンピニィにある自分の城へ帰してしまい、夫人に会えないことを悲しみ、焦ったギーズ公は、シャンピニィの城までやって来る。その時、モンパンシエ公に見つかりそうになり、絶体絶命の窮地に立たされるが、シャパンヌ伯が彼を逃し、モンパンシエ公の怒りを自分の上にひきつけ、ギーズ公は危機を脱する。しかし、この恐怖の体験からモンパンシエ夫人は重い病氣となり、ギーズ公はやがて、夫人を忘れて新しい恋人へ移っていき、シャパンヌ伯はサン・バルテ

ルミィの虐殺の時に誤って殺されてしまう。これらの打撃に耐え切れず、夫人の病気は悪化して、その短い生涯を終えるのである。

以上がこの小説の筋である。〈嫉妬深い夫〉、〈人妻を愛する男〉という設定は、『クレーヴの奥方』を思わせるが、二つの作品の主演達の人物像には大きな相違があるように思われる。クレーヴ公が常に妻を信頼し、妻の告白によって初めて嫉妬を抱いたのに対して、モンパンシエ公は、二年の留守の後、妻の完成された美しさを見た時に、すでに嫉妬めいたものを感じており、他の男が妻の美しさに少しでも関心のある素振りを見せただけでもう不機嫌になり、妻にあたり、ギーズ公との仲に疑いを抱くとすぐに、妻をシャンピニィの城へ帰し、いわば、幽閉してしまうのである。シャンピニィで、妻の部屋にシャパンヌ伯の姿を見つけ、妻の不貞を確信した時のモンパンシエ公の怒りは激しく、自分を裏切った二人に復讐したいと願うが、行動には踏み切れない。彼は、まず第一に世間体を考え、自分の名誉が傷つけられることを恐れているように思われる。彼は、病気を口実に部屋に籠り、宮廷から呼び出されると、妻と顔を合わせずにすむことにほっとするのである。そして、虐殺に巻き込まれたシャパンヌ伯の死体を見つけ、《運命の手によって復讐が遂げられた》と喜ぶ。全編を通して、モンパンシエ公は〈嫉妬深い夫〉という面は遺憾なく発揮しているが、妻を深く愛しているという印象はあまり感じられない。彼の嫉妬は生来の性質からきており、夫としての体面を重んじる気持ちの方が強く、妻を熱愛しているが故の嫉妬ではないように思われる。真の情熱を抱いてはいない彼が、社会の一員としての枠を越えることがないのは当然といえよう。そして、この点こそ、ヌムール公に対する嫉妬と妻に愛されない絶望とに打ちひしがれた死の床でなお、切々と妻への愛情を訴えかける悲壮なクレーヴ公と、根本的に違うところではないだろうか。

若い名門の貴族で、風采もよく、才気煥発で野心にあふれ……ギーズ公には、《自然の傑作》と紹介されたヌムール公と共通する点が数多く見うけられる。しかし彼は、ヌムール公よりはずっと大胆で、モンパンシエ夫人の愛を得る為にはどんな手段をもためらわない。恋を打ち明けるあらゆる機会を逃さず、モンパンシエ公もいる、シャンピニィの城へ夜忍び込むことさえ辞さないのである。内親王（後のナヴァル女王）との結婚を拒絶し、モンパンシエ夫人の為に野心を犠牲にしたといっても、これは、純粹に愛情によるものだけではなく、シャルル九世、アンジュー公（後のアンリ三世）との仲が険悪になってきた事情も多分に影響しており、しかも彼は、この犠牲を口実にモンパンシエ夫人に迫るしたたかさも見せている。彼の行動には、人妻という彼女の立場への考慮は見あたらず、一目散に獲物をめざす強引さの印象が強い。ギーズ公には、自分の欲望、野心にのみ駆られた驚くべきエゴイズムが見うけられる。そこには、社交界を離れ、一人で物思いに耽るヌムール公の長編小説の主人公にふさわしい抒情性は感じられない。シャンピニィの城に忍び込んで夫人を窮地に立たせた事件の後、彼は夫人の病気のことを知りながら、父親の復讐に心を奪われているうちに²⁾夫人のことを忘れ、新たな恋人へ心移していく。しかも、その関係が公然となるままにまかせ、モンパンシエ夫人の死期を早める結果を招くのである。ヌムール公は、クレーヴ夫人が修道院に入った時に、思いつく限りの手段を尽してクレーヴ夫人の翻身に努め、それが全て徒労に終わって絶望の淵に沈みなが

らもお誂めかねて、彼が恋を忘れたのは、何年かの悲しみの月日を過ごした後であった。もっともこれは、クレーヴ夫人が最後までヌムール公を拒み続けたということもあり、クレーヴ夫人がモンパンシエ夫人のように、もっと簡単に愛情の印を見せていたらどうであったかという疑問も湧いてくる。そういった意味では、クレーヴ夫人が仄めかした愛情の不確かさ、男性の生来の移り気といったものがこの作品において、より生々しくはっきりと描かれているともいえる。しかし、それでも、人が変わったと噂されたヌムール公ほどの深い愛情を、ギーズ公が抱いていなかったことは確かであろう。彼の愛情は《よりたやすく望みのかないそうな》ノワルムティエ夫人の方に簡単に乗り換えてしまうような質のものであり、〈伊達男〉の〈征服〉の一つにすぎない。『クレーヴの奥方』のヌムール公は〈恋するドン・ジュアン〉であるが、ギーズ公は、終始、只のドン・ジュアンである。

モンパンシエ公、ギーズ公がまず〈武人〉であったのに対して、シャバンヌ伯は、二人よりも年長で、教養の高い、有徳の士である。モンパンシエ夫人を熱愛するようになった彼は、一年の間、自分の心を抑えようとするが抑え切れず、夫人に告白する。しかし、彼女から与えられるものは友情だけであった。それ以後彼は、悩み苦しみながらもついに夫人の幸福のみを考える境地に達するのである。

《伯爵の愛情は、夫人の幸福と名誉だけを考えるように、彼をごく自然に導いていったので、愛している女性とその夫の仲が円満にいくことを妨げようとする、恋する男が、ふつう持つ気づかいを、苦もなく忘れてしまったのである。》（9頁）

モンパンシエ夫人とギーズ公の愛が再燃したことを知った時、シャバンヌ伯は驚き、深く悲しんだが、それでも自分の恋を消すことはできず、夫人に頼まれるがままに、二人の恋の仲立ちまで務める。それは、彼にとって拷問にも等しい苦しみであったが、彼の愛情は、この屈辱的な役割をも引き受けさせてしまったのである。夫人の不貞が夫に露見しそうになった、その絶体絶命の瞬間に、彼の愛情はその頂点に達する。

《シャバンヌ伯は、モンパンシエ公の声を聞いて、夫人の部屋に誰かがいることはもう隠しきれないことをさとした。そして、ここでギーズ公が見つかってしまえば、夫人は自分の目の前で彼が殺されるという恐しい苦しみを味わわなければならないし、夫人の命さえも危ないと考え、自分の身を捨てて、この無情な女性と、愛されている恋敵を救おうという、この上なく雅量のある決心をした。》（29頁）

最後のこの捨身の犠牲によって、彼は屈辱から抜け出したといえよう。世間体を重視する嫉妬深いモンパンシエ公と、自分の欲望のままに行動する移り気なギーズ公の姿を思い浮かべる時、友に対する裏切りや恋敵の手助けをするという屈辱に傷つき、自分の過ち、弱さに悩みながらも、なお、愛情に引きずられて捨身の犠牲にまで至るシャバンヌ伯の姿は、悲壮であり、そこには崇高ささえ漂う。深い孤独な絶望を抱いてシャンピニエを出て行った彼は、サンバルテルミエの殺戮に巻き込まれてあえない最期を遂げる。

《翌朝、モンパンシエ公は、郊外に指図をするために出かけたが、その途中で、シャバンヌ伯の死

体のある道を通りかかった。彼はまず、この痛ましい光景に驚き、友情が蘇って悲しみを感じた。しかし、伯爵からうけたと信じている侮辱のことを思い出して、ついには喜びを感じた。》(32頁)

乾いた筆致で描かれた、彼のこの死は、酷く、痛ましい。

モンパンシエ夫人は、愛している男を義兄に持つことの危険を考え、モンパンシエ公との結婚を同意したわけであるが、それ以後の彼女の課題は、結婚前の恋を忘れることであり、離れていればそれは可能だと信じたのである。夫の親友、シャパンヌ伯に、以前自分がギーズ公を好きだったことを打ち明け、同時に、その気持ちは殆ど消えてしまっており、わずかに残っているとすれば、それは別の恋に向って心が開かれるのを防ぐのに必要なだけの気持ちぐらいたと語る時、彼女は、禁じられた恋によって、禁じられている恋を、つまり悪によって悪を克服できると信じているのである。それはまた、彼女のギーズ公に対する感情が唯一の価値を持ち続けるということでもある。自分の恋が消えたと信じているのは錯覚であり、彼女は、ギーズ公の華々しい武勲の噂を喜ばしく聞いたりもする。こういう彼女がギーズ公と再会して、彼が示す数々の愛情の素振りに、自分の昔の恋を思い出すことは容易であった。クレヴ夫人が、終始、自分の気持ちを隠そうと努め、ヌムール公との会話を避け続けたのに対して、モンパンシエ夫人は、自分の嫉妬から彼に怒りを見せることによって、自分の気持ちを相手に見抜かれ、長い会話を持つ機会を自分から与えてしまう。彼女は、嫉妬を武器に愛情を克服しようとするが、これは危険なことである。嫉妬は愛情に付随したものであり、愛情に対する武器には到底なり得ない。嫉妬を認めることは、愛情を認めることである。こうして、モンパンシエ夫人の愛情は大きくなっていき、自分の責め言葉でギーズ公に内親王との結婚を犠牲にさせる結果を招いて彼につけ入る隙を与えてしまい、ずるずると情熱に引きずられていく。最後に不貞が夫に発覚し、ギーズ公にも捨てられ、シャパンヌ伯は死んでしまい、彼女は孤独な死を迎えることになる。

《夫の尊敬と恋人の心を失い、二人といたない友人を亡くしたこの苦しみに、彼女は耐えきれなかった。それから数日後、まだ若さの盛りで息をひきとったのである。》(33頁)

この作品においては、『クレヴの奥方』に見られるような、ヒロインの自分の心との闘いは殆ど見あたらない。ギーズ公への愛を抑え、貞淑な妻でいようとする彼女の気持ちは述べられてはいるが、それも表面的な描写にすぎず、ヒロインの深い感情は描かれないうちに、彼女は一直線に破滅の道をたどる。モンパンシエ夫人には、クレヴ夫人のような、夫への義務という観念はあまり見あたらないし、また同時に、自分を熱愛しているシャパンヌ伯を自分の恋の為に、彼の苦悩を思いやることなしに利用することを考えたりするエゴイズムも示している。彼女には、必死に自分と闘う、感動的なクレヴ夫人の気高さは感じられない。そして、激しい愛情の猛威の前に、なし崩しに引きずられていくこのモンパンシエ夫人の姿こそが、クレヴ夫人の最も恐れた姿であるように思われる。

以上、『モンパンシエ公爵夫人』の、主要人物について見てきたが、彼らの中では、シャパンヌ伯だけが、独自の感動的な性格の一端をのぞかせて、後のクレヴ公を思いおこさせるといえる。しかし、全体的に見て、この作品の人物像には、『クレヴの奥方』の、主役達がそれぞれ個性を示し、慣習的な世界から抜け出て物語独自の世界の中で生きているといった印象は、殆ど感じられな

い。

『モンパンシエ公爵夫人』には、愛情の虜となって無分別な行動を取り身を滅していく女性の姿が描かれているが、しかし、この物語には、彼女の過ちを罪として糾弾する響きは感じられない。彼女は罪人というよりもむしろ、恐るべき〈愛—熱情〉の猛威の被害者として描かれているのであり、〈愛—熱情〉の犠牲者であるモンパンシエ夫人、シャパンヌ伯の不幸な生涯を通して、作者の〈愛—熱情〉に対する苦い観念を読み取ることができる。自我の崩壊、嫉妬の苦悩、愛情の不確かさ、男性の生来の移り気、結婚と愛情の両立の不可能さ、社会が個人に課す制約……これらのテーマは『クレヴの奥方』において再び取り上げられ、より深くヒロインの心の中に踏み込んだ心理分析を通して、一つの〈倫理〉にまで高められていくであろう。

以上見てきたように、ラファイエット夫人は、その最初の作品から、彼女の厭世的な世界観をはっきり示しているといえる。とはいえ、この作品はまだ、その〈証明〉の段階であり、人物像にも心理の描き方にも物足りなさが残る。この一種の未熟さは小説技法においても見うけられる。

この作品の〈叙述〉についていえば、まず、何ヶ月かの出来事を何行かの記述で通り過ぎ、一つの場面にしばらく立ち止まるという、要約と場面が交互に現われる書き方がある。これはジャン・ルーセが『クレヴの奥方』についての論文で指摘している〈交替〉の手法の一つといえよう³⁾。この手法については後述するが、この場合は、これによって主人公の心理的变化の重要な瞬間だけが浮かび上がり、物語に個有のリズムと時間を与えているように思われる。

ところで、この小説は、17世紀前半に流行した英雄小説に代わって注目を浴びるようになってきた中編小説の形式を取っている。この形式の特徴の一つとして、〈語り手〉は〈事実のみを述べる者〉として話から距離を置いて客観的に語るということが挙げられる。これに沿って、『モンパンシエ公爵夫人』も、〈語り手〉は事件や登場人物の感情を単純過去形で語り、自分から離れた〈現実〉として話を進めている。しかし、稀に〈語り手〉が話の中に介入してその存在を示すことがある。まず第一に、〈回想録作者〉として、人物の歴史的な性格を付加的に説明する場合である。《のちに〈向こう傷〉とあだ名されるようになったギーズ公》とか、《アンジュー公、のちのアンリ三世》といった具合に説明を加えるのである。更にその仲介を進めて、〈語り手〉が〈心理学者〉として人物の行動について説明する時がある。とりわけ、その行動が通例のものではないと思われる時であり、それは説明を通り越して、弁解や糾弾になったりする。

《しかし、毎日毎日、ごく間近に見ている魅力から自分を防ぎようもない。》（7頁）

《熱情の及ばず効果は、彼の場合も、他の人々と同じであった。》（7頁）

《恋をしている時、人は弱いものである。》（25頁）

この〈語り手〉を見ていくと、その考えがラファイエット夫人の世界観とは必ずしも一致していないことに気づく。〈語り手〉は、人間の弱さに寛大で、時には、激しい熱情に生きる人々に対する賞讃さえ示すが、事態が悪くなったり、社会の秩序がおびやかされるとすぐに徳の美点を唱える、社交界一般の考え方に近いように思われる。最後の《もし、徳と慎重さに導かれて行動していたならば、

彼女は最も幸福な女性になり得たであろう。》(33頁)という一文も、この〈語り手〉の視点において理解されるべきであろう。このようにして〈語り手〉は、ラファイエット夫人の徹底した厭世主義を、フィルターに通した形で読者である社交界の人々に示す役目を果たしている。また、事件と、登場人物達の感情を同じ〈叙述〉の形式で語ることによって、〈語り手〉は、行動と心理を同じ視点で描き、外部と内部を同一面に置くことにも成功している。物語が殆ど間接話法で語られていることが、この〈叙述〉の一貫性をより明らかにしているといえよう。しかし、こうした視点の持続はある種の単調さを否めない。そして、一本調子の語りロヤ語彙の少なさは、読者の注意を登場人物の感情に集中させるともいえるが、それ以上に作者の拙さを感じさせることも事実である。深い心理を描ききれていないこの作品においては、ラファイエット夫人は、自分の世界観を表明するのに十分な小説技法をまだ見つけてはいないように思われる。

Ⅱ 『ザイード』(1670-71)

『ザイード』はカスティリャ伯爵の息子、コンサルヴが、陰謀の犠牲となり、レオンの宮廷を逃れて孤独を求めて彷徨うち、美しい娘ザイードと出会い、恋におち、離れ離れになった後再びめぐり逢って、数々の障害を越えて彼女と結ばれるという話で、中心となるコンサルヴとザイードの恋物語と、登場人物達の長い身の上話である五つの挿入話から成されている。これは、叙事詩に倣った伝統的な長編小説——物語は事件の途中から始められ、それ以前の話が挿入話(一人称、時に三人称)で語られ、会話、独白が豊富に使われる——の形式をとっている。プレソジテの長編小説の慣習を引き継いだこの小説は、主人公の人物像も月並で、個性は感じられない。コンサルヴは、身分も高く、高潔で勇敢であり、ザイードには何らの欠点もない。型通りのヒーローとヒロインである。

それよりも、この作品において注目されることは、〈愛—熱情〉のテーマが全編を支配しているということである。この小説の中で、当時サロンで流行った〈愛に関する質問〉が取り上げられ、サロンの考え方とは違った解答が物語の形で与えられているように思われる。とりわけはっきりした相違が見られるのが〈尊敬からの愛〉の問題である。コンサルヴは、レオンの王子、ドン・ガルシィと、友人のドン・ラミールとの会話の中で、よく知らない相手を受することはできないと主張する。この問題はすでに『クレリー』(スキュデリー嬢、1654—60)において検討されており、スキュデリー嬢は、よく知り合った相手への尊敬から生まれる愛情の方に軍配を上げている。これは、理性によって行動や愛情を制御できると信じているプレソウズの意見を代表している。『ザイード』においても、主人公のコンサルヴはこの意見で、一見、ラファイエット夫人もスキュデリー嬢に与しているように思われるが、その後の話の中でこの考えは否定されていく。自分の主張通りにニュナ・ベラと恋仲になったコンサルヴは、彼女に裏切られ、失意の中で出会った未知の女性ザイードに一目で恋をするのである。言葉も通じないザイードに恋した彼は、自分の間違いを認め、こう言っている。

《ああ、ドン・ガルシィ、あなたが正しかった。我々の心を一瞬で捉える愛以外は愛ではない。他は皆、我々の心が意識的に抱く感情にすぎない。》(88頁)

ラファイエット夫人は、プレジウズの主張する〈尊敬による愛〉を認めていないように思われる。彼女にとって〈愛—熱情〉とは、理性を超えたものであり、猛威をふるう恐るべき力なのである。中心となるコンサルヴとザイードの恋は確かに幸福な結末を迎えるが、これは、長編小説の慣習に従っただけであり、ラファイエット夫人の人間観がよく現われているのは、むしろ挿入話の方であろう。挿入話の中の主要人物達の殆どは〈愛—熱情〉の痛ましい犠牲者であり、とりわけ「アルフォンスの話」、「フェリームの話」、「アラミールの話」において、その性格が顕著である。常軌を逸した嫉妬の虜となるアルフォンス、自分を愛した女性達を隠遁や回宗へ走らせる、移り気で冷酷なアラミール。しかし、そのアラミールも、ザイードに恋して変貌して、嫉妬からコンサルヴと闘い死んでいき、アラミールへの報われない愛に苦しむフェリームは、彼の死に絶望し、コンサルヴとザイードを呪いながら死んでいくのである。いずれも皆、自分の熱情に理性を狂わされた、不幸な人々である。

『モンパンシエ公爵夫人』では、一女性の悲劇を通して〈証明〉された愛情の恐ろしさが、『ザイード』では、複数の人物の経験を通して断片的に〈証明〉されている。ただ、「アルフォンスの話」の中で、アルフォンスを深く愛しながら、彼の狂気ともいえる嫉妬に苦しめられ、互いの自我の崩壊を恐れて、二人の〈心の平安〉の為に修道院に入るベラズィールは、クレヴ夫人に通じる道をかすかに示しているように思われ、興味深い。

このように、あちこちに散りばめられた、ラファイエット夫人の〈愛—熱情〉に対する観念は、前作と変わらず苦いものであり、プレジウズの観念とは大きな隔たりを見せている。だがそれだけに、長編小説の慣習を引き継いだ物語の幸福な結末が、作者の世界観と著しい対照を見せており、この不調和は、『ザイード』の否定しがたい欠点といえるのではないだろうか。これが、当時は大きな人気を博したこの小説が現代まで生きのびられなかった大きな原因であるように思われる。

『ザイード』には、〈叙述〉の面においても幾つかの不備が見うけられ、とりわけ挿入話において甚しい。第三者の話をする時には、話者がその話をきちんと整理して語ることは理解できるが、自分の話をする時に、まるで初めからすべてを知っていたかのように語るのは不自然である。例えば、コンサルヴは、その出来事の時点では知らなかったことを、その時すでに知っていたかのように話す。これは、彼自身が体験した順序ではなく、実際に起こった順序で話している為である。ラファイエット夫人もこのことは意識していたらしく、真相を教えてくれる人物、オルモンを用意し、コンサルヴに、《彼が言ったことをここで繰り返すことはやめましょう。というのも、僕の話に秩序を与える為に、その大部分はすでに話したことなのです。》(85頁)と言わせる。このようにして、多少の〈真実らしさ〉は確保されたかもしれないが、コンサルヴとオルモンの視点が混ざってまぎらわしく、この不統一性は物語を不自然なものにしているように思われる。さらに、コンサルヴは陰謀の主謀者達の会話をすべて聞くことができたかのように語ったり、第三者に自分の身の上話をしている時に、直接話法の独白のような言葉を挟むことさえあり、読者の異和感を募らせる。また、これらの挿入話はそれぞれの〈語り手〉を持ち、〈叙述〉を引き受ける者が何人もいるわけだが、それが語り口の多様さとは結びついてはいないように思われる。彼らの口調は一様なのである。マウル人もスペイ

ソの貴族も⁴⁾、同じように洗練された言葉を話し、彼らの独白も会話もプレソジテの色彩が濃く、一本調子である。

このように、『ザイード』には、言語、文体においても、プレソジテの性格が強く感じられる。が、全く長編小説の慣習に屈しているわけではなく、ラファイエット夫人の独自性も見いだすことができる。

この小説の決まりとして、主要人物の言葉や行動の意味は後になってからではないとわからない仕組みになっているが、これは読者の興味をそそる為であった。ラファイエット夫人はこの形式にもっと深い機能を与え、彼女の世界観に結びつけているように思われる。自分の心をはっきり見ることができるのは常に事後であるという彼女の人間観が、物語と回想、つまり、混乱状態にあるその場の行動と、その後の内省の〈交替〉によって表わされているのである。いつも遅すぎる内省というこの観念は、『クレヴの奥方』の主要モチーフとなるが、そこにおいて我々は、より鮮やかな〈交替〉の手法を見いだすことができる。

『ザイード』では、ラファイエット夫人は、長編英雄小説の慣習に折れたわけであるが、この長編小説特有の構造を自分の世界観の本質的な部分の一つに結びつけたのは、彼女の力量と言える。とはいえ、その世界観を物語の結末と一致させるまでには至っておらず、反対に、一人称の形を利用できず、この形式による数々の不都合は否定できない。しかし、この経験は『クレヴの奥方』に生かされていくであろう。

Ⅲ 『クレヴの奥方』(1678)

『クレヴの奥方』も前の二作と同様、〈愛—熱情〉がその主題である。ラファイエット夫人にとって、〈愛—熱情〉は自己の尊厳の失墜をもたらす恐るべき力であり、幸福とは結びつかないものであることは、前に見た通りである。常に他人の行動を見張り、その失敗を待ちうける無数の目が光っている、虚偽に満ちた社交界の中で、破壊的な愛情の猛威の犠牲者となり、それに引きずられていきながらも必死に自分と闘い、最後の一线で踏み止まるヒロインの悲壮な闘いに焦点をあて、彼女の思考過程をたどりながら、ラファイエット夫人は、〈愛—熱情〉の恐るべき力の前になすべもなく破局を迎えていく前の作品の犠牲者達を超えて、〈心の平安〉を求めて、社交界を捨てて一筋の光明に導かれた新しい生活へ入っていくヒロインの姿を描いている。『モンパンシエ公爵夫人』、『ザイード』では〈証明〉の段階であったラファイエット夫人の世界観が、この作品では〈倫理〉の段階に達しているように思われる。そこに、ラファイエット夫人の思想の深まりを見ることができるが、それと同時に、彼女が自分の世界観を表明する小説技法を身につけたことが、この傑作を生み出す大きな力となっていることを見逃してはならないであろう。

ラファイエット夫人の作品では、主人公達の心理が重要な位置を占めている。ヌムール公と出会って愛を知り、喜び、悲しみ、嫉妬の苦しみを味わい、心の中で、人間、人生、社会の本質的な問題に疑問を投げかけながら、最後に〈愛—熱情〉を否定し、世間の価値観を離れていくクレヴ夫人の一

連の過程を描く為には、単なる感情描写ではなく、もっと深い心理の洞察が必要となってくる。この心理分析の観点から、ラファイエット夫人の小説の手法について考えてみたい。

一人称の挿入話を多く含んだ、『ザイド』の長編小説の形式から、ラファイエット夫人は、再び中編小説の形式に戻っている。『モンパンシエ公爵夫人』と同様に、〈語り手〉は、社交界の慣例に従い、読者と近い考え方をする存在である。この〈語り手〉の性格によって、その登場人物に対する讃嘆の念や共感^{共感}は読者にも同じ感情を抱かせると同時に、物語を通してこの〈語り手〉は登場人物達の過失に寛大で、ヒロインの一連の行動、とりわけ最後の隠遁を理解を超えた事のように描いており、自らの過ちに厳しく、〈愛—熱情〉を否定する、ヒロインの特異な行動、非凡な性格を浮き彫りにしている。

〈語り手〉は、『モンパンシエ公爵夫人』同様、〈事実のみを述べる者〉、〈回想録作者〉、〈心理学者〉の役目を担っているが、『クレヴの奥方』においては、〈心理学者〉がより重要な位置を占めている。宮廷の人々は、外側から描かれており、主にその態度、言葉を通して話の中に現われ、彼らの心理が述べられることはあまりない。内面化されていない社交界の人々との対照によって、四人の主要人物——クレヴ夫人、クレヴ公、ヌムール公、シャルトル夫人——が舞台に浮かび上がってくるのである。こうして、〈心理学者〉の対象は、専ら彼ら四人になるわけであるが、クレヴ夫人を除く三人の心理は、ヒロインの行動に影響を与える場合のみに語られ、大半は、短かく示唆的な感情描写に終始している。彼らの考えは、まず第一に、その態度、行動、言葉によって伝えられ、〈語り手〉の仲介も心理分析的というよりも、描写的である。彼らの思考過程が示されることは殆どないのである。この結果、心理分析の焦点はヒロイン一人に絞られてくるわけであるが、その視点も一様ではないように思われる。

シャルトル夫人の死までは、クレヴ夫人の感情は、〈心理学者〉としての〈語り手〉によって描写的に述べられ、他の三人と同じような背後の視点から紹介されることが多い。この視点が時折その三人に委ねられ、彼らの目を通してクレヴ夫人の感情が読者に知らされることがある。これによって、物語の中でのヒロインに当てられている照明の色彩を変える効果をあげている。母親の死後、クレヴ夫人が一人で自分の心と闘い始めた頃から、この視点の委託は少なくなり、代わって、クレヴ夫人の内省が多くなる。殆どが〈間接話法の独白〉の形で語られているこの内省の中で、時に、クレヴ夫人の考えが間違っていることが指摘されることもあるが（≪しかしこれは彼女の思い違いである。≫310頁）、これは極く稀で、〈語り手〉は全知の特権を濫用せず、大体においてクレヴ夫人の知識の範囲に止まっている。これによって〈語り手〉は、いわば、ヒロインと重なった視点でその心理を描き、〈語り手〉が前面に出やすい時に、隠れることに成功したといえよう。また、〈語り手〉がヒロインと同じ視点を持つことによって、読者をヒロインの感情に同化させる効果もある。我々は、社交界の価値観と一致している〈語り手〉の視点から物語りの中に入り、話の進展に従ってヒロインの視点で物語りを生き、最後に彼女が俗社会を捨てると同時に、再び元の社交界の視点に戻るのである。こうしてラファイエット夫人は、〈叙述〉の視点の変化によって、幾つかの角度からクレ

ーヴ夫人の心理を描き、この小説における彼女の優越的地位を浮き彫りにして、深い感情の動きを見事に表現していると同時に、読者を物語の中に引き入れることにも成功しているといえる。

視点が内面の分析に焦点を合わせていたように、〈叙述〉そのものも、読者の注意を一気に主人公達の心理に向ける為に、余計な〈描写〉は省かれている。描写的要素は、物語りの筋、登場人物の行動に関わりがある場合に限られ、〈叙述〉の流れの中に組み込まれている。例えば、クレーヴ夫人の身体的特徴については「シャルトル侯は姪の美しさを見て驚いたが、それも無理はなかった。白い肌と金色の髪は、彼女に、他の人には見られない輝きを与えていたし、顔立も整い、顔にも姿にも優美さと魅力があふれていた。」(248頁)という記述があるだけだが、これもシャルトル侯の驚きを通して述べられており、彼女の美しさを強調し、ヌムール公との恋物語を説明するのに必要最低限のものである。また、心理分析も、人物の意識の流れが尊重されており、生活の動きの中に組み込まれている。『モンパンシェ公爵夫人』同様、『クレーヴの奥方』でも外部と内部、すなわち、行動と心理が同一面に描かれているので、内面の世界が現実感を帯びてくる。こうして、〈叙述〉は〈描写〉にも心理分析にも中断されず、常に一貫した流れを保っているといえよう。

この一貫性は、一人称の形をとっている挿入話の中でも続いている。「ヴァランシノワ夫人の話」、「トゥールノン夫人の話」、「アン・ボレインとヘンリー八世の話」の三つは、話者自身の話ではなく、話者は第三者として話から距離を置いて語っており⁹⁾、唯一つ、自分自身の話をする「シャルトル侯の話」も、彼自身より王妃の心理に重点が置かれているので、話の調子は前の三つとあまり変わらない。これら四つのエピソードは、全体として、他の部分と同じ三人称の話という印象が強く、この部分では、登場人物の一人が〈語り手〉の役割を引き受けていると見ることができよう。

『モンパンシェ公爵夫人』では、一貫した〈叙述〉の流れが、ある種の単調さを感じさせたが、『クレーヴの奥方』では、豊富な〈直接話法〉が、物語にアクセントを与えている。まず、〈会話〉であるが、これは、主人公達の行動を進ませる役目を担い、プレシウズのサロンの会話の静止感はない。大部分の〈会話〉はその一部が〈直接話法〉で紹介され、他は要約されることが多い。直接話法は、劇的緊張を盛り上げるのに必要な量だけであり、返答の言葉が一つだけということもある。クレーヴ夫人とヌムール公の最後の会見を除いて⁹⁾、これらの〈会話〉には、内観の印は見あたらず、〈会話〉は心理分析にはあまり貢献していないように思われる。

また、この〈会話〉の配分を調べてみると、興味深い事実気づく。〈告白〉までのクレーヴ夫人は、話者として現われる機会が少なく、専ら、彼女は注意深い聞き手に回っているのである。自分に向けられた言葉に対して、彼女の返答は短いものが多く、沈黙したままということもしばしばである。これは、社交界の好奇の目に囲まれているヒロインの姿と、彼女が自分の感情を隠すことに気をとられているということを暗示しているように思われる。〈告白〉の後、彼女の言葉は増えていき、最後に会話の主導権を握るまでに達するが、それは、彼女が、自分の言葉で自分の心を語るができるまでに内省を重ねた結果である。この〈会話〉の配分に、ヒロインの変革が象徴されているといえるのではないだろうか。

長編小説に特徴的な、〈直接話法〉での〈独白〉は、この作品では五回（クレヴ夫人が二回、ヌムール公が三回）しか使われていない。クレヴ夫人の〈独白〉は、まず、手紙事件の後で、嫉妬について考え、ヌムール公の目から逃げ出すことを決心する場面である（330頁）。二回目は、〈告白〉の噂が広まっていることを知り、ヌムール公の態度について考える時である（351—352頁）。どちらも彼女の気持ち混乱している時であり、〈独白〉の間は〈語り手〉の姿は消えている。これらの〈独白〉は古典主義悲劇を思わせ、小説の他の部分と対照をなし、話の調子にアクセントをつけ、この物語の感動的な性格を明らかにしているといえよう。また、〈独白〉には、ヒロインの心の動揺がはっきりと現われており、自分の心を明確に捉えることの難しさという、作者の人間観が投影されているように思われる。こういった〈独白〉の働きは、情熱の吐露が中心で、あまり深みの感じられない、ヌムール公の〈独白〉よりはっきりと現われている。（352、369、381頁）

〈直接話法〉で紹介された〈会話〉の残りの部分を要約して、〈直接話法〉を一貫した〈叙述〉の流れの中に組み入れる為に重要な役割を担っているのが〈間接話法〉であるが、〈間接話法〉はまた、〈言う〉を〈考える〉に代えることによって、登場人物達の考えを我々に伝える。外に現われる言葉の世界と内部の意識を同一面に置き、外部と内部の垣根を取り払う〈間接話法〉の使い方は、『モンパンシエ公爵夫人』にも見られたが、『クレヴの奥方』では、先に触れたように、クレヴ夫人の内省にもふんだんに使われており、〈間接話法〉は、この小説の中心をなす心理分析に最も重要な役割を果たしているといえよう。

最後に、ラファイエット夫人に特徴的な〈交替〉の手法について少し触れてみたい。

『ザイード』とは小説の形式が異なるこの作品では、物語と回想の〈交替〉は使えない。また、和平になった、アンリ二世末期の一年間を舞台とする『クレヴの奥方』には、宗教戦争の混乱の六年間の話である『モンパンシエ公爵夫人』に見られた要約と場面の〈交替〉もあまり見うけられない。『クレヴの奥方』では、ヒロインの外的生活の場である社交界と、内的世界である心理という外部と内部の〈交替〉が主要な位置を占めているのである。宮廷生活は、皇太子妃の部屋での会話、社交界に渦巻く陰謀、華やかな公式行事に集約され、内面生活との対照によって、それは我々の目には、儀式的で虚飾に満ちた上べだけの世界としか映らなくなり、内面世界の方が現実味を帯びてくる。

この外部と内部の〈交替〉の手法は、『ザイード』の物語と回想の〈交替〉の場合と同じように、ラファイエット夫人の世界観と緊密に結びついているように思われる。外部は、クレヴ夫人が社交界に現われ、他人の視線の下にある時であり、内部は内省の時間である。社交界では、彼女は自分で知らぬ間に行動をしており、一人になってそれを思い返して茫然とするのである。

〈自分が心に抱いている激しい恋のしるしを、今日、あの不実な男性に見せてしまい、彼への恋のためにつれなくしているもう一人の男性にも見抜かれてしまった。夫人は、強く鋭い悔恨を覚えた。〉（310頁）

〈クレヴ夫人は一人になって、愛している男性と一緒にいる喜びにはりつめていた気持ちが弛むと、夢からさめたような気がした。〔中略〕昨日、同情のしるしをヌムール公に見せたことを罪のよ

うに後悔しながら、今日、不機嫌な顔をして、愛情の確かな証拠である嫉妬の気持ちをはっきりと見せてしまったと考えると彼女はもう自分で自分がわからなくなった。》(329頁)

まず行動があり、それから自覚が来るわけであるが、〈愛—熱情〉の恐るべき力の勢力下にあるクレヴ夫人の行動は、常に彼女の意志とは無縁のものであると同時に、無意識の告白であるといえる。彼女の気持ちは、その行動によって、自分が気づく前に、他人、とりわけ夫や恋人に知られてしまうことになる。外部と内部の〈交替〉による対照によって、人間は自分の心の中に本当に入りこむことはできず、注意深い他人の視線のみが炯眼であり得るといふ、ラファイエット夫人の人間観がよりはっきり理解できよう。

また、社交界の場面と内省の場面との〈交替〉は、あまりに鋭敏な視線に監視され、常に遅すぎる覚醒に中断される半夢遊状態の中で、語り、行動するヒロインの姿を浮き彫りにしている。自分自身に対する不可能な洞察力を空しく追い求めていくうちに、〈熱情〉の恐ろしい力と理性の限界を悟っていくクレヴ夫人には、最初の頃の〈無辜の安らぎ〉は二度と戻ってこないであろう。彼女がこの後に求める〈心の平安〉は、人間の弱さを認めたところから出発するものであり、彼女が人間のレベルに止まっている限りは得ることはできないものである。〈交替〉による対照の構造が明らかにしている世界観から導かれるこの小説の結末が、楽観を許さないものであるのは当然といえよう。

クレヴ夫人の内省を表わす〈間接話法の独白〉を読んでいくと、それは、彼女の心が動揺しているにも拘らず、きちんと整理された言葉で語られていることに気づく。この作品の表面に現われている言葉は、殆どが、混乱した心の言葉ではなく、熟慮された意識の言葉であるように思われる。理性を狂わす〈熱情〉の言葉はどこにあるのであろうか。それは、言葉の中ではなく、他人の前にいる時の行動の中にこそ現われているのではないだろうか。無意識の行動や顔の表情、沈黙などが内心の混乱の表現であると考えれば、他人と接触している時のヒロインの振舞と内省との対照は〈言語〉の面にも及んでいるといえよう。この対照によって、クレヴ夫人が心の混乱をさらけ出すのは、虚偽に満ちた社交界の中であることがわかる。これは、エピソードの中の、ヴァランチノワ夫人、トゥールノン夫人に代表される、仮面をつけて生きている社交界の人々と際立った対照をなし、ヒロインのこの世界では生きにくい性格が強く印象づけられる。ここからも、この小説の結末は予想できるであろう。彼女の隠遁は、避けることのできない運命であったように思われる。このように、ラファイエット夫人は、最初の作品から用いられている〈交替〉の手法を、『クレヴの奥方』では、更に発展させ、その構造を、自分の世界観と小説の結末とに完全に一致させたといえよう。

以上、ラファイエット夫人の三つの作品を通して、彼女の世界観と小説技法について簡単に見てきた。一女性の不幸な生涯を通して、〈愛—熱情〉に対する苦い観念を〈証明〉している『モンパンシエ公爵夫人』は、終始一貫した起伏の乏しい語り口と、無駄のない文章が、愛に溺れ、破滅へ墜ちていくヒロインの姿を容赦なく、一気に描きだしており、枚数の少ないこの作品⁸⁾の内容と合っているといえるが、ある種の単調さは否めない。また、深い心理分析が行われていない人物像は、個性に乏

しく、読者に与える感動は少ないように思われる。

長編小説の慣習の大半を引き継いでいる『ザイード』は、その慣習と、作者の世界観が一致せず、まとまりに欠ける印象が強い。物語の中に回想を挟む、長編小説の約束事に自分の世界観を盛りこんだところに、作者の力量は感じられるが、一人称の話の処理の不手際、プレシウス文学の色彩が濃い文体などの欠点が目につき、この作品では、ラファイエット夫人は、まだ、自分にあった小説技法を求めて、手探りの状態であったことを感じさせる。

『クレヴの奥方』で再び中編小説の形式に戻ったラファイエット夫人は、一貫した〈叙述〉の中に、多くの〈会話〉、〈独白〉を盛り込んで、話の調子にアクセントをつけ、『モンパンシエ公爵夫人』の単調さを解決したと同時に、ヒロインの内省を表わす〈間接話法〉の使用が、前の作品には見られなかった深い心理の洞察を可能にし、この小説の中心をなす、ヒロインの思考過程を描くことに見事に成功している。また、行動と内省という外部と内部の〈交替〉の構成を発展させることによって、不備の多い冗漫な長編小説の形式に頼らずに、緊迫感のある中編小説の形式の中で自分の世界観を表わす方法を身につけ、『クレヴの奥方』を『ザイード』の異和感から救っている。

このようにしてラファイエット夫人は、自分を破滅にひきずりこもうとする〈熱情〉と必死で闘う一女性の心理を深いところまで掘り下げ、隠遁へと至る思考過程を見事に描きだして、初期の作品から見つけられた世界観を一つの〈倫理〉にまで高め、また同時に、自分の世界観、物語の内容、小説の構造の三つを完全に一致させる技法の会得によって、この作品に深みを与え、読者を物語りの中に引き入れる力を持つ、感動的な傑作を生み出したのである。しかし、当時は大きな人気を博しながらも時代の試練に耐えられなかった、『モンパンシエ公爵夫人』、『ザイード』の経験が、今なお多くの人々に読み継がれている『クレヴの奥方』の大きな糧になっていることは否定できないであろう。『モンパンシエ公爵夫人』から『クレヴの奥方』に至る十六年間は、ラファイエット夫人の世界観と、その小説家としての技量が並んで発展し、深まっていった重要な時期であるように思われる。

テキスト及び主要参考書

Mme de Lafayette: *Romans et Nouvelles* Garnier, 1970.

※本文中の引用は全てこの版による。

Mme de Lafayette: *La Princesse de Clèves*, Textes Littéraires Français, Droz, 1950.

Mme de Lafayette: *La Princesse de Clèves dans Romanciers du XVII^e siècle*, Gallimard, Bibliothèque de la Périade, 1973.

M-J. Durry: *Madame de Lafayette*, Mercure de France, 1962.

J. Fabre: *L'Art de l'analyse dans la Princesse de Clèves*, Ophrys 1970.

R. Francillon: *L'Œuvre Romanesque de Madame de Lafayette*, José Corti, 1973.

A. Niderst: *La Princesse de Clèves*, Larousse, 1973.

B. Pignard: *Mme de La Fayette par elle-même*, Seuil, 1959.

J. Rousset: *Forme et signification*, José Corti, 1962.

A. Adam: *Littérature française*, L'âge classique I, Arthaud, 1969.

P. Clarc: *Littérature française*, L'âge classique II, Arthaud, 1969.

M. Lever: *Le roman française au XVII^e siècle*, Presse Universitaire de France 1981.

〔注〕

- 1) ラファイエット夫人の作品はこの他に、『アンリエット・ダングルテールの生涯』と『タンド伯爵夫人』があるが、前者は回想録である。後者は枚数の少ない中編小説であるが、製作年代について、今も論議がわかれ、確定していない。従って、本論文ではこの二作はとりあげなかった。
- 2) この小説のギーズ公、アンリ・ド・ギーズの父親フランソワは新教徒に殺されている。
- 3) J. Rousset: *Forme et signification* pp. 17-44.
- 4) コンサルヴ、ドン・ガルシィ等はスペイン人で、ザイード、フェリーム、アラミールはマウル人である。アルフォンスはナヴァールの名門の出である。
- 5) 「ヴァランチノワ夫人の話」はシャルトル夫人、「トゥールノン夫人の話」はクレーフ公、「アン・ボレインの話」は皇太子妃がそれぞれ話者となっている。
- 6) 告白の場面と、最後の会見の会話は、古典悲劇を思わせると言われている。
- 7) 『モンパンシエ公爵夫人』はガルニエ版で約30頁、『ザイード』は200頁、『クレーフの奥方』は150頁ほどである。